

小学校音楽教科書の研究

— 問題点と課題 —

森 下 修 次

1. はじめに

学校現場において教科書は重要である。社会科の教科書は内容、特に歴史分野について議論されることも多く、どの教科書がどの自治体どの学校に採択されるかなど世間の感心は大きく、報道機関も熱心に取り上げる。では音楽科の教科書はどうであろうか。私の知る範囲では音楽科の教科書の採択を一般紙で大きく取り上げられたことはなく、世間一般に話題になることもなかった。ひとつには音楽科が重要な教科と認識されていないこと、現場の教員、特にむしろ優秀な教員が教科書を部分的あるいは全面的に使用しないで、授業の学習効果をあげていることもその一因かもしれない。

では、学校の授業で必ず使われるはずの教科書をなぜ使用しないで問題にすらならないのか。実はそこに今日の学校音楽教育の問題の一面が表れている。

2. 教員研修を通して見えてきたもの

新潟大学教育学部では新潟市と提携し、新潟市教職12年経験者研修（以下12年研と略す）が行われている。新潟市に在籍する採用12年目の小中学校教員が教科に別れて研修を行うもので、大学教員は新潟市教育委員会の指導主事と協力して夏期休業中に3回ほど授業案作成と模擬授業をとおして指導助言を行う。新潟県と新潟市は多くの都道府県で採用されている音楽専科の教員を置いていないが、それでも大学で音楽教育が専攻であったり音楽が得意な教員で校内行事の音楽や校内音楽科授業の中心的役割を任されることが多い。

12年研修ではこれから行おうとする授業の授業案を検討することが中心であるが、小学校教員は教科書を中心に授業展開考えてくる割合が高い。大学が12年研修に関わるようになって数年が経つが、現場ではいろいろ問題を抱えたまま、授業を行っているケースが多々あると感じている。もちろん、個々の教員の資質の不足や教員として適正かどうかなど個人的な理由の問題も無くはない。しかし、それよりもむしろ教科書の内容通りに使用したために起こる問題が多いと感じている。特に小学校音楽でそれが顕著のように思われる。

3. 事例

事例1 「おかしなすきなまほう使い」

新潟市では平成24年現在、教育芸術社小学校音科の教科書が採択されている。

教育芸術社小学校3年生教科書のP. 27に掲載されている「おかしなすきなまほう使い（譜例1）」という楽曲は、この楽曲の歌唱と歌唱の途中に児童自ら工夫した「まほう」の音を作るという教材である。3年生を担当している教員は研修の時期と教科書との進度が合うせい、この楽曲を選択してることが多い。

譜例 1

おかしなすきな まほう使い

♩=116~126 秋葉てる代 作詞/大熊嶺子 作曲

おかしなすきなまほうつかい パンプキンパイが たべたくて
※歌詞は1番のみを表す。
かぼちゃにまほうをかけてみた ワン ツー ワン ツー スリー
あれあれどうした これほ けむりがもくもく アッチッ チ
お さらがも えてる アッチッ チ た めい き を つ い た

この曲は、他愛のないかわいらしい曲であり、楽曲そのものに特に問題があるのではない。この楽曲の学習活動の中心は「まほうをかける音」をつくって歌唱することである。P.26-27に楽譜と歌詞の扱いなどが指示された文言、イラストが載っている。その後、P.28-29にイラスト入りで下記の文言が記されている。

音のとくちょうをかんじとりましょう

●ひびきの長さや音色のちがいをききくらべながら、「まほうをかける音」をつくりましょう。

① トライアングルとカスタネットを鳴らして、ひびきの長さのちがいをかんじとりましょう。同じトライアングルとカスタネットを鳴らして、ひびきの長さのちがいをかんじとりましょう。

② いろいろな音を鳴らして、ひびきの長さや音色の違いをききくらべましょう。

③ 響きの長さや音色を考えながら、音の組み合わせをくふうして、思えがいた「まほうをかける音」をつくりましょう。

少なくともここでは楽器や奏法の違いによる音色の学習を目指しているようだ。ただ実際の授業では教科書に示した様々な打楽器を試奏させたところで教室中が大音響で音があふれ、授業どころではない状況に陥る例を目撃した。もともと40人の児童に同時に音を出させざるを得ない音楽科の授業では、よほどの対策を取らない限りこのような事態に陥ることはしばしば起こりうるが、ここで指摘する内容はそのことではない。むしろ、この教材を使用してうまく行ったように見える授業が問題になるケースが多かったのである。

では、何が問題か。教科書の③の指示から「まほうをかける音をつくる。」ことがこの授業の最終目標になってしまうことである。「まほうをかける音」の効果音を作ることの何が問題であるかということ、効果音は音楽の中核をなす構造に当てはまらないために、学習の積み重ねや発展への見通しが立たないことである。本来この教科書で示された音色の学習は音楽構造から見ても重要な要素であることは間違いないが、この教材では求められる音色の質が音楽構造から見ても必然性が見えないことである。例えばラベル作曲「ボレロ」を鑑賞教材として取り上げる場合、この曲には小太鼓の音が曲の冒頭から最後まで延々と続けられている。冒頭部分の小太鼓

の音色と終盤近くの色は、リズムはほとんど同じであるにも関わらず明らかに強弱、音色が異なる。これらを決定するのは単純に f や p といった強弱記号が記されているからというより、全体の音楽的構成から必然的に演奏される音色が求められることが重要な要素である。このことはスコアを見れば歴然としているし、CD等の音を聴くだけでも十分理解出来るだろう。これらの必然性を理解できれば、小学生でも十分15分程度の鑑賞が可能であろうし、私が知っている事例では、鑑賞前に指導をうけたほぼ全ての児童が実際に15分全曲を聴き入っていた。

「おかしなすきなまほう使い」において「まほうをかける音」の必然性はどうか。「まほうをかける音」はシナリオを朗読し、譜例1の楽譜を歌った後、次の歌詞を歌う間で「まほうをかける音」を演奏するよう指示されている。指導書では、「おかしなすきなまほう使い」は音楽づくりを目的としたオリジナルで様々な楽器の音の特徴を感じ取る (P.66) とある。実際に「まほうのおと」抜きでこの曲を歌唱しても何の不具合も感じられない。むしろ、下手に効果音を挿入すれば音楽の流れを止めてしまう危険性すら感じてしまう。音楽における必然性とは、もし、その音楽的要素がないと仮定したときに音楽として成立できなくなる、できても著しく価値を下げる状態になることと考えられる。先ほどの「ボレロ」の小太鼓の音色も、音色の変化を付けないような機械的な演奏をすれば、楽曲全体の演奏をつまらなくするだろう。そのことが必然性である。

事例2 「ほしぞらのようすにあうおとをえらびましょう。」

教育芸術社小学校1年生教科書P.38に掲載されている「きらきらほし」は18世紀末フランスで流行したシャンソン “Ah! Vous dirais-je, Maman” が原曲と言われている。教科書では「ほしぞらのようすにあうおとをえらびましょう。」の題材名がかかれてあり、その下に次のような指示が記されている。

●おほしさのようすをおもいうかべながらうたいましょう。

●うたをどれみでおぼえたら **鉄琴** と **鍵盤ハーモニカ** または **ハーモニカ** でえんそうしましょう (□内はイラストで表示)。

●まえのぺえじでみつけたおとのあとにつづけて「きらきらほし」をうたいましょう。

とある。さらに見開きのページの右下には

おとあそび

●したのおはなしのようすにあうおとをつくって、「きらきらぼし」をうたったあとにならしましょう。

「そらがすこしずつあかるくなって、ひかっていたおほしさまが、だんだんみえなくなってきたよ。」

ここの学習は、P.35の「シンコペーテッドクロック」の鑑賞でトライアングルの奏法を鑑賞の中から聴き取り、P.36で鈴（すず）とトライアングルの奏法について説明につながる。さらにP.37では、下記のような指示がイラスト入りで記されている。

おとあそび

●よぞらでおほしさまがひかっているようすをおとであらわしましょう。

●したのおはなしをよんで、それぞれのようすにあうおとをみつけてならしましょう。

「あつ、とおくのおそらで一ばんほしがひかりはじめたよ。」

「ほら、あっちでもこっちでも…おほしさまがだんだんふえてきたね。」

「たくさんのおほしさまが、たのしそうにうたっているよ。」

ところでこの単元の問題は何か。鑑賞から表現へと続く流れは、むしろ必要だと思われ、さらに音楽づくりを含む表現と鑑賞の授業が必要性的な流れを持ってなされるべきだと考えられる。実際私の見た授業は教育実習生の授業であったが、P.37のイラストを大きく描いて黒板に掲示し、子どもたちにかなり分かりやすく指示したにも関わらず、子どもたちが何をすればいいのか理解されず学習活動が止まってしまった。これはP.37のイラストや文言で即興的演奏が求められているからで、おそらく譜例2のような音がでてくればよかったのだろうか。教科書の指示を元に作曲を試みた。

譜例2

♪♪♪.♩の単打と♪のトレモロで組み立てたが、教科書には単打とトレモロの指示がなく、どのようなリズム、すなわちどのような音楽の枠組みで音を組み立てれば良いのか指示はない。もし、上記のような音が出てくることを期待するのであれば、

1. ♪♪♪.♩の単打と♪のトレモロを組み合わせる。
2. 4/4拍子とする。
3. 最初の4小節（1番星）は1台で、次の4小節（おほしさまがふえてきた）は台数を2台、次の4小節（たのしそうにおほしさま…）は3台で、という枠組みの理解と指示が必要になる。つまりこれから演奏しようとする音楽の構造を示すことが必須であると考えられる。このような具体的な学習内容を示してこそ学習の積み上げが可能になる。さらには、日本では「きらきらぼし」と歌われているが、本来、旋律と星は無関係であること、すなわち作曲家が星のある風景から啓示を受けて作られた作品ではないということである。この曲を星と絡ませて表現させることが、教育効果を高めるために必要かどうかについては疑問が残る。また、イラストのイメージを利用した音楽づくりも問題があるように思われる。例えば大人がこれらのイラストから詩を作れといわれたら経験と知識を総動員して何とかできるだろうが、子どもだとどうだろうか。難しいかもしれないが、子どもたちが自身のもっている音楽的語彙を組み合わせることができるかもしれない。では子どもたちはどんな音楽的語彙をもっているのだろうか。実はこの点こそ一番の問題点である。音楽的語彙をもたない子どもはこの課題をどうやってこなせばよいのだろうか。どのような音楽構造をもってこの課題に望んでよいかわからない状況で課題を遂行するのは不可能である。即興、すなわち、音楽づくりと演奏表現を同時に行う学習活動を行うためには相応の学習の積み重ねが必要である。

事例3 「曲のとくちょうを感じ取りましょう。」

教育芸術社小学校4年生教科書P. 30～31は「せんりつのとくちょうを感じ取ろう」という単元の一つとして「曲のとくちょうを感じ取りましょう。」という学習内容が設定されており、ハチャトゥリアン作曲の舞踊組曲「ガイヌ」から「つるぎのまい」とサン＝サーンス作曲の組曲「動物の謝肉祭」から「白鳥」が取り上げられている（譜例3、譜例4）。

譜例3

譜例4

註：この楽曲はチェロの独奏とピアノ2台で構成されているが、教科書ではチェロとピアノ1台として扱われ、指導書添付のCDもその編成のものが選ばれている。

この2つの曲を鑑賞し、次のような課題が提示されている。

- 2つの曲は、それぞれどのような感じがしましたか、話し合ってみましょう。
- 感じのちがいを生みだしているそれぞれの曲のとくちょうをみんなでまとめてみましょう。

クラシック音楽には様々な様式があり、その差も結構大きいものである。例えばシェーンベルグの12音技法無調性音楽とJ.S.バッハの対位法を主体とした調性音楽は全く異なった音楽的特徴を持っていると言える。ここの教材の2つの楽曲もかなり異なった音楽で、2つの楽曲が違うことは明白である。おそらく、それまでいろいろな音楽構造の学習を積み上げてきた児童にとっては、何を考えたり見つけだす課題なのかよく分からない。もちろん、ここで求められている音の動き、リズム、速さ、強さについて明確に言葉で表現することはそれなりのスキルが必要で意味のあることだと思われるだろう。しかし、「強い-弱い」、「あらあらしい感じ-静かな感じ」、などのように単純化して言葉で述べるのが音楽鑑賞の最終目的ではない。「強い-弱い」の間には連続的に強弱の中間点が有り、そのことを感じ取ることが大切な事のはずだからだ。教科書に例として載っている「つるぎのまい」の「あらあらしい感じ」も中間部のサクソとチェロのSoliの部分は「あらあらしい感じ」と言い切れない。要は楽曲の中に既に対比構造が組み込まれており、さらにそういった微妙なニュアンスを感じ取ってこそ鑑賞という行為が成り立つと考えられるからである。

実はこのことを相談に來られた小学校の先生がおられて、協議の結果、この2つの楽曲の共通点は何かについて授業で行ってみることになった。この2つの楽曲の共通点はA-B-Aの三部形式で構成されている。

実際の授業で子どもたちは実に注意深く2つの楽曲を聴いていた。しかも、三部形式ということを理解すると、楽曲内の対比構造も理解したようで、本来の意味の鑑賞が成立していたように思われた。

4. 音楽学習の積み重ね

今回は新潟市で採用されているために教育芸術社の教科書のみを取り上げたが、他に小学校音楽科の教科書を出版している教育出版、東京書籍とも多少とも問題はあると考えられる。

音楽学習は教科独特の指導方法があると思われるがちだが、実際は他の教科、例えば国語学習と共通点も多い。「小学校学習指導要領解説国語編」(2008)によると、国語教育はA話すこと・聞くこと、B書くこと、及びC読むことの各領域から構成されているが、それら国語科の指導内容は、「系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている。」(P.7)とある。音楽教育もA表現(器楽・歌唱・音楽づくり)及びB鑑賞が明記あり、表現の仕方こそ違おうが、「相手にメッセージをどう伝えるか」、「相手のメッセージをどう受け取るか」、という点においては同じだということが分かる。また、様々な学習内容の積み上げが螺旋モデルで説明される件も、「小学校学習指導要領解説国語編」(2008)の共通事項や、教育芸術社「平成23年度小学校用教科書内容解説資料」P.3に示されている螺旋モデルが示しているように、学習の積み上げという観点が同じであることが示唆される。

ここで指摘した問題は、実は教科書固有の問題ではなく、むしろ今まで行われてきた学校教育現場の問題を反映していると考えの方が妥当であろう。実際普段から学校教育に接していると、「工夫」や「イメージ」といった単語がよく使われる。それらの言葉を使用する際、具体的な内容を指示しているときはよいが、むしろ具体的な内容を想定していなく、結果的に学習活動内容を子どもたちに「丸投げ」しているケースがしばしば見受けられる。「丸投げ」された子どもたちは当然何をしてよいのか分からず右往左往するばかりである。「丸投げ」が発生するのは、指導する教員が明確に教える内容、特に音楽構造を把握していないからと考えられる。音楽構造を把握していれば、音楽表現の自由度が極めて限定的だと分かるはずである。音楽の構造は、調性、リズム、強弱、形式などの基本構造は決まっており、その中で、例えば強弱をどう演奏するか、しかも学校現場で行われているような *f* や *p* といった大雑把なものでなく、僅かな音色の変化を伴うデリケートな *f* や *p* を扱うようなことが、音楽を扱う上での自由度である。子どもは基本構造を把握しているわけではないので微妙な表現は難しく、特に小学校低学年の子どもにはまず構造を理解する方向性の授業が必要である。

また、音楽を教える上で必要不可欠なのが必要性である。すなわち、音楽構造は偶然で成り立ってい

るわけではなく必然性があることを忘れてはならない。楽譜も必然性・必要性があるから使用している。音楽の授業を組み立てる際には、そのことも忘れてはならない。

5. 学校現場で必要とされる教科書

音楽の教科書は国語や算数の教科書と比べてとき学習内容を積み上げに関して、まだ不十分だという印象がある。ただ、教育現場では新潟周辺を見る限り、指導要領の共通事項の扱いを通して改善の兆しが見える。

また、小中連携が叫ばれて久しいが、小学校でしっかりとした基本的音楽スキルをつけ、中学校では生徒が基本的スキル持っていることを前提にした授業をできることに持って行かなければ音楽科という教科に未来はない。しかし、現実にはスキルはおろか歌うことさえろくにできない生徒を前にして右往左往している中学校も少なくはないだろう。そのために「小学校でこれだけは確実に身につけましたよ」といえる教科書が必要になってくる。

さらに、小学校の教員は全教科教えなければならぬ現実がある。教育系大学でも専攻以外の各教科に割く時間は限られている。つまり、小学校教員、特に新任教員はそれぞれの教科を常に勉強しながら教えているといえる。そういう点では音楽の苦手な教員が子どもたちと一緒に勉強しながら学習を進められる教科書が必要なのではとも思える。

おそらく教科書出版社は優秀な現場教員の協力のもと、教科書に内容が児童生徒に有効に伝わるか検証は行っているだろうが、今後は優秀でない、ごく一般的な教員、できれば苦手な教員にも協力してもらい検証と改良を行うことが重要になるだろう。現場教員が優秀でなければならないと叫び続けているだけでは全ての子どもたちにより授業を提供することは出来ない。優秀な教科書、考え抜かれた教科書を通して教員を育てることも考えないと、おそらく日本の学校現場の音楽の授業はますます下降線をたどってしまうだろう。現在でもカラオケで授業を済ませてしまうなど、音楽の授業とは言えない授業がまかり通っていると聞く。大学や学会はそういった現状を打破するための研究がもっと必要だし、教科書の出版社も学会の成果を取り入れて、今までのしがらみにとらわれない全く新しい教科書を是非開発してほしいと願っている。

【引用・参考文献】

- 小原光一 ほか12名 (2011), 『小学生の音楽
3』, 教育芸術社
- 小原光一 ほか12名 (2011), 『小学生の音楽
4』, 教育芸術社
- 小原光一 ほか12名 (2011), 『小学生の音楽
1』, 教育芸術社
- 文部科学省 (2008), 『小学校学習指導要領解説
音楽編』, 教育芸術社
- 文部科学省 (2008), 『小学校学習指導要領解説
国語編』。東洋館出版社
- ハチャトリアン バレエ音楽「ガイーン」第1組曲
(スコア) 日本楽譜出版社
- サン＝サーンス 動物の謝肉祭 (スコア) 日本楽譜
出版社
- 森下修次 (2009) 「読譜にどうむきあうか」音楽教
育実践ジャーナル vol.7 no.1 pp. 25-32